

日本計量生物学会 ニュース・レター No.11

1983年12月

目 次

I B C大会に積極的参加を	(竹内 啓)
B I O M E T R I C S論文要約	(大橋、椿、丹後、鎌倉)
XII I B C 組織委員会第1回会議議事録	
第1回幹事会議事録	
第1回募金部会報告	
第1回プログラム部会報告	
組織委員会名簿	
第12回国際計量生物学会議の開催の ための準備・運営に関する合意書	
「日本学術会議第13期会員選挙の中止」のお知らせ	
1984年度学会費納入のお願い	
会計からのお知らせ	

御承知のように、来年9月初めに、I B Cの大会が東京で開かれる。こういう会議を日本で開くとき、大抵は準備は大変周到に行われ、運営、接待すべて申し分なく行われる。外国での同様な会合において、しばしばいろいろ「手ぬかり」が生ずるとくらべると、まず満点に近く、外国からの参加者に賞賛されることが多い。特にわが日本計量生物学会では、多くの有能な方々からなる準備委員会が作られ、すでに活発に活動しておられるので、大会の成功自体は疑いない。しかしこのような大会において、時にはがゆく思われるのは、日本側が準備に莫大なエネルギーを費したのに対して、大会そのものの舞台は外国側の学者によって占められてしまうように思

東京大学経済学部
竹内 啓

I B C大会に積極的参加を

えることである。また時に日本側では、このような機会に外国の学者に「教を請う」というような態度が見られることさえある。

日本における計量生物学の歴史は、アメリカやイギリスにくらべて日も浅く、学者の層も薄いといわざるを得ないが、しかしすでにいくつかのすぐれた研究がなされ、また一人一人の研究者には、大変立派な方々がおられるので、研究のレベルとしては外国にひけを取ることはないといってよい。

今度の大会では、裏方だけでなく、表舞台でも多くの人々が、日ごろの研究を発表したり、討論に加わったりして、積極的な学問上の相互交流を深められることを期待したい。

Biometrics Vol. 38, No. 4
December 1982

多精子受精のモデル

B. J. T. Morgan

885-898

ウニの卵での多精子受精を阻止するメカニズムは、2段階過程から成立している。すなわち、初期の“速いブロック”とその後起こる“ゆっくりしたブロック”の2段階であり、その間に受精膜が形成され、精子の進入は阻止される。

この論文では、この2段階過程についていくつかの確率モデルを提案し、実験データに適用している。

これらのモデルのあてはめによりわかったことは、受精率そのものの値は、“速いブロック”の後でも通常いわれている程減少はしないということである。

むしろ受精率は時間とともに変動するのである。最初の受精までは、増加していくが、受精した後では減少していくのである。また、“速いブロック”と“ゆっくりしたブロック”間での受精が起こる率は、“速いブロック”が起きた時点から測った時間とともに減少していくのである。

(丹後俊郎)

細胞病理学データの回帰分布

A. S. Whittemore, J. W. McLarty 他

899-905

ヒト細胞の光学顕微鏡検査は、今日、悪性又は前癌性病態の発見のために、重要なツールとなっておりつつある。この場合、ヒトから採取された上皮細胞は、細胞単位に正常から悪性までの何段階かの程度に標識される。そして標識された細胞群の中で最も異常の程度の高いものが、その標本の病態の“得点”を決定するのである。

この論文では、宿主側が、発癌物質に暴露された状況にみられるように、いくつかの特性から病態得点を回帰するモデルを提案している。

このモデルは、アスベスト作業者の一集団から

得られた痰の標本に応用され、適合度の評価がなされている。

(丹後俊郎)

Michaelis-Menten パラメータの

推定：偏り、分散、実験計画

D. J. Currie

907-919

Michaelis-Menten 関数のパラメータの推定値の正確度、精密度は、用いるカーブフィッティングの方法により異なるが、この論文では、計画行列すなわち、独立変数に対する値の設定も同様に重要であることが示される。

3種の fitting 方法のパラメータ推定の効率をモンテ・カルロ法で比較し、各々の手法の計画行列における変化に対する感度を調べている。

正確にK濃度で半分の観測値をとり、残りはできるだけ高濃度での値をとって、最尤法でカーブフィッティングすることにより最小分散不偏推定値が得られる。

ある範囲の基質濃度にわたって観測点をとるような計画は、偏った、高い分散をもつ推定値しか得られないことがわかる。

等比数列をなす観測点列で観測し、最尤法または、Eisenthal, Cornish-Bowden のノンパラメトリック法でフィッティングを行えば、どちらもまずまずの推定値が得られることを示した。

(丹後俊郎)

不完全データを用いる、生存時間と発病までの時間分布のノンパラメトリック推定

G. E. Dinse & S. W. Lagakos

921-932

死亡時に罹患していたか否かが判るような回復不能の病気を対象として、発病までの時間と(その病気によって)死亡するまでの生存時間の分布のノンパラメトリックな推定の問題が考察される。競合リスクによる死亡あるいは実験途中の意図的な剖検のため、得られるデータは打切りを伴う不完全なものである。

ノンパラメトリックな最尤推定量を求めるには反復解法が必要となるが、反復を一回で打切ることによって、なじみ深いかつ閉じた形で表現できる推定量 — 生存時間分布に対する推定量は

Kaplan-Meier の乗法型の推定量、発病までの時間分布に対する推定量は、isotonic 回帰推定量となる — が得られる。これらの分散に対する近似的な推定量が与えられ、次に、提案された手法と Kodell et al.(1982, Biometrics 38, 43-58) らの提唱した推定量とが比較される。後者は、生存しているという条件の下でまだ発病していない確率に単調非増大性を仮定した制約付きの推定量である。最後に、Kodell et al. の動物実験のデータに提案された手法が適用される。

(大橋靖雄)

患者の脱落のパターン不均一性を補正した 癌生存率

T. Hakulinen

9 3 3 - 9 4 2

ある期間に渡って癌患者が生存するか否かは、しばしば“相対生存率”によって測られる。相対生存率とは患者の群で測定された生存率と、目下研究中の病気を除けば生存に影響するような背景因子すべてが患者の群と類似した一般的な母集団の群の生存率との比として定義される。患者の群をいくつかのサブグループに分けた場合、現行の相対生存率の導出法では、サブグループの脱落パターンに違いがあると偏りが生ずる。“期待生命表”の概念に基づいた偏りを除くための方法が提案されている。Finnish 癌登録所の資料に基づく例から、提案した方法は他の方法より実効率が高いことが分かる。また、サブグループの相対生存率に違いがある場合もそのようなことが言える。

(鎌倉稔成)

Mantel-Haenszel 推定量の分散

N.E. Breslow & K.Y. Liang

9 4 3 - 9 5 2

複数の 2×2 分割表が共通なオッズ比をもつとき、その対数(対数オッズ比)を推定する際には Mantel-Haenszel 推定量が用いられることが多い。この共通な対数オッズ比の分散に対する 4 通りの推定法の挙動をモンテカルロ実験によって調べたのが本論文である。

Hauck (Biometrics 35, 817-819, 1979) は分割表の個数を固定して、各分割表に

属する標本数を大きくした場合の漸近分散を求めた。これに対して、Breslow (Biometrika 68, 73-84, 1981) は、各分割表に属する標本数は有限個に留めたうえで、分割表の個数を大きくした場合の漸近分散を求めた。これら 2 つの推定法は、各々が立脚している漸近論の前提が満たされているような状況では、適当な手法であるが、そうでないときは良い推定値を得られないことが実験より分った。

そこで、本論文では、これら 2 つの推定量の重み付き平均を用いる方法、及びジャックナイフを用いる方法が提案されている。分割表の個数、分割表に属する標本数、共通なオッズ比を変化させた数値実験では、かなり広い範囲で、ここで提案された 2 つの手法が良い性質を示し、検定や区間推定を構成するには十分な精度を持っていることが認められた。

本論文では更に、対数オッズ比に対する、Mantel-Haenszel 推定量と経験ロジスティック変換に基づく推定量を比較し、後者が真のオッズ比が 1 から乖離するに従い大きな偏りを生じてしまうため良くないということも指摘されている。

(椿 広計)

2 形質の場合の独立な culling-level

による選択に対する最適な切断点

S.P. Smith & R.L. Quaas

9 7 5 - 9 8 0

2 つの独立な culling levels による選択に対する最適切断点を決定する問題が母集団のある一定の割合が選択される場合について検討されている。“最適”とは選択された母集団で遺伝的変数の期待値を最大にする点という意味で定義されている。最適な点を計算するための効率的なアルゴリズムが提示される。解のグローバルな性質が議論されている。3 つ以上の culling levels に対する拡張がなされる。

(鎌倉稔成)

多形質選択実験による遺伝母数の推定値の 精度の推定

F.C. Gunsett, K.N. Andriano 他

9 8 1 - 9 8 9

多形質選択実験による遺伝的変化は遺伝子型の

表現型への回帰とみることができる。この結果から相加遺伝分散共分散の推定値を得る方法が導かれる。この方法では不変な解を与えるために回顧指数 (index-in-retrospect) によって得られる選択荷重を利用する必要がある。モンテカルロ・シミュレーションから得られる解の分散の推定値は通常の最小2乗法による分散の推定値とは一致しない。これは誤差がある構造Vを持って分布することを示している。Vとしては誤差に対する知識を利用する形が提案される。提案したVを用いれば一般化最小2乗法から得られる分散の推定値はモンテカルロによる推定値と平均分散推定値が一致する。初めの推定手続きをしたのち導かれるVを利用すれば推定値の分散の十分な情報となることが示される。(鎌倉稔成)

判別分析における連続変数と離散変数との混合：仮説検定論的アプローチ

W. J. Krzanowski
991-1002

二つの多変量正規母集団間の判別という古典的問題に対して、従来三つのアプローチがとられている：ベイズ判別規則中の未知パラメータに最尤(あるいは不偏)推定量を代入する estimative な方法(得られる判別関数をAndersonのW統計量という)、未知パラメータに適当な事前分布を仮定し、オッズ比の事後分布をベイズ推定しようとする predictive な方法、尤度比検定を行なって割りつけを行なおうとする testimative な方法(得られる判別関数をJohnのZ統計量という)である。

最近の研究の結果、ある条件の下ではZ統計量の方がW推定量より良い結果を与えることが知られているが、本論文では、連続変数と離散(カテゴリー)変数とが混合した状態での testimative な方法について考察が加えられる。ここで採用されているモデルは、離散変数の組み合わせによって平均が異なる(分散行列は等しい)という location モデルである。まず testimative な方法が導出され、誤判別率の推定法の概要が述べられる。次に、いくつかの例が呈示され、estimative な方法や線形判別関数適用の結果と比較される。(大橋靖雄)

比率の比較のための最適配分

E. Brittain & J. J. Schlesselman
1003-1009

二群間で、ある事象の発生比率を比較する際に、調べる個体数をどう配分すればよいか、という問題が議論される。二つの比率を p_1, p_2 としたとき、(i) $p_1 - p_2$ の推定精度を最大にする (ii) p_1/p_2 の推定精度を最大にする (iii) 差を検出するための検定の検出力を最大にする (iv) 研究に要する費用を最小にする という四つの規準の下で最適な配分規則が導かれる。目的によって最適配分規則は大きく変わることを、しかしながら、ほぼ最適とみなせる配分規則の範囲は広いことが注意される。最後に、糖尿病にかかっている婦人の奇形児出産の割合に関する研究計画が例示のために用いられる。(大橋靖雄)

最大値をとるように選ばれた χ^2 統計量

R. Miller & D. Siegmund
1011-1016

2標本問題において、計量データが得られている場合でも、ある切断点を設定して、それ以上或いはそれ未満といった具合にデータを2分し、 2×2 分割表を構成してから、 χ^2 検定を用いて母集団の同一性を推論することはしばしば行なわれる。ところで、医学方面等でよく見られるのは、この切断点を χ^2 検定統計量が最大となるように後知恵で決めることである。勿論、このような状況に対して通常の χ^2 分布のパーセント点を用いて検定を行なうのは不適當である。

本論文では、このような「最大 χ^2 統計量」の正しい有意確率の求め方(但し、大標本の場合)及び、パーセント点の教表が与えられている。(椿 広計)

最大値をとるように選ばれた χ^2 統計量の
小標本での挙動

J. Halpern
1017-1023

本論文は、Miller & Siegmund の論文と同様に後知恵で切断点を決める3種の方法、「最大 χ^2 統計量」、「最大平方対数オッズ比」「コル

モゴロフ・スミルノフ統計量」の帰無仮説のもとでの小標本分布がシミュレーションで求められている。特に、前2者は互いに比較され、また Miller & Siegmund の大標本論から得られる分布とも比較されている。

更に、これら3種の統計量が計算される切断点自体の分布及び3者の一致性等も考察されている。

(椿 広計)

第12回国際計量生物学会議 組織委員会第1回会議議事録

I 日時 1983年10月24日(月)

15:40~17:15

II 場所 日本学術会議第5部会議室

III 出席者

国際会議委員：浅井晃、大崎純、工藤昭夫、
齊尾乾二郎、竹内啓、角田重三郎、
廣崎昭太、福島要一

運営委員：飯淵康雄、井山審也、大竹正徳、
奥野忠一、小泉明、後藤寛治、
佐久間昭、塩見正衛、正法寺孝雄、
鈴木茂、椿広計、長谷川政美、
鳩山由紀夫、林知己夫、菱沼従尹、
福富和夫/栗原恵美子、末益牧子

IV 議事

1. 仮議長選出—学術会議会員福島要一氏が選出された。
2. 「第12回国際計量生物学会議のための準備・運営等に関する合意書」の確認—日本学術会議事務局で用意した資料に基づき、合意書、組織委員会名簿、組織委員会運営要領が読み上げられ、承認された。
3. 委員長の選出—全員の推薦により林知己夫統計数理研究所長が組織委員会委員長に推薦された。同氏のあいさつがあり、以後の議事は林氏議長の下に進められた。
4. 幹事の選出、総務幹事の指名—学会側が用意した資料1に基づき、幹事の構成名簿案が示され、そのまま承認された。また総務幹事には、委員長から奥野忠一東京理科大学教授が指名された。

5. 今までの準備状況について—奥野幹事から第9回のボストン、第10回のサントス(ブラジル)、第11回のツールーズ(フランス)での国際計量生物学会議で日本開催の話が進んだ経過、および日本計量生物学会が2年前からこの会議の準備委員会・運営委員会をもって準備してきた経過を述べた。また、本年8月12日の閣議諒解により日本学術会議との共同主催がきまったこと、日本学術振興会が募金団体となって免税措置の申請をしていることが報告された。

6. 今後の準備運営について

- ①会議計画の大綱—資料2に基づき、1984年9月2日~8日の日程が説明された。
- ②部会の構成—上記資料1に基づき、募金部会、経理部会、プログラム部会の構成案が示され、承認された。
- ③予算—資料3に基づき、大綱が説明された。外国人旅費としては、招待論文発表者の分だけが計上されているが、それ以外にも著名な外国人学者、途上国の研究者を招待したいとの発言があり、それは募金の集まり状況、経費の節減によって可能になるかもしれないが、その判断は幹事会にまかせ、組織委員会としては事後承認することにきまった。
- ④予備登録状況—当日までには約50名位との報告があった。(10月末/切で講演申込は外国人122名、日本人55名、計177名参加のみの申込は外国人32名、日本人10名、計42名、総計219名である)
- ⑤今後の準備日程等—資料4に基づき説明された。当面はセカンド・サーキュラーを発行すること、大蔵省の許可があり次第免税募金活動を開始すること、寄稿論文をさらに募集するがそのアブストラクトを1月末に/切ってセッションプログラムを作るなどの仕事がある。組織委員会は来年7月頃に第2回を、会議終了後報告書作成がすむ11月頃に第3回を開くことをきめた。

第12回国際計量生物学会議 第1回幹事会議事録

(組織変更に伴い名称を変えたが、第10回総務小委員会にあたる)

- I 日時 1983年11月5日(土)
10:40~14:30
- II 場所 統計数理研究所会議室
- III 出席者 奥野忠一、浅井晃、井山審也、大橋靖雄、佐久間昭、正法地孝雄、鈴木茂、竹内啓、椿広計、長谷川政美、廣崎昭太、山本俊一/吉田恵子(I CS)、鈴木広行(JTB)

IV 議事

- Second Circular について
ICSが作成した原案に基づき全体の構成を検討した後、項目ごとに審議した。
Invited paper Sessionの№10のOrganizerはA.R.SenにきまったとSolomon氏から手紙が来たが、№8は未定のままである。Registration feeが何をcoverするかは書かないことにする。Form Aは今からでもcontributed papersを受けつけることを、Bはregistrationとfeeの納入方法を、CはHotel reservationとpost session tourの申込みにあてる。family program scientific tour, social programの詳細はfinal circularにまわす、ことなどをきめた。これらを整理して、10日(木)午前に少人数のメンバーで原稿を完成することにした。
- 協賛学会などのBiometrics Societyのnon-membersに参加を呼びかける運動をする。とくにアジア諸国、共産圏の人々へのアプローチを検討する。
- Invited speakersの旅費負担については、地域別定額をきめてSolomon氏へ早急に連絡する。
- 次回は12月9日(金)16時より開き、幹事の分担をきめる。

第1回募金部会報告

(名称を変えたが第5回募金小委員会にあたる)

- I 日時 1983年10月24日(月)
18:00~20:00
- II 場所 統計数理研究所会議室
- III 出席者 菱沼従尹、井山審也、奥野忠一、小泉明、駒沢勉、佐久間昭、林知己夫
- IV 議事
- 経団連の割当表に基づき、1件10万円以上のところの担当者をおおよそきめた。
 - 寄付申込のあったところにはお礼に行くなどの計画を立てた。
 - 万博協会への寄付依頼書を事務局が作成して早急に送る(10月末メ切)ことと、11月はじめに菱沼部会長にあいさつに行き行くことをきめた。

第1回プログラム部会報告

(名称を変えたが第3回プログラム委員会にあたる)

- (1) 日時 1983年10月24日(月)
18:00~20:00
- (2) 場所 統計数理研究所会議室
- (3) 出席者 竹内啓(委員長)、大竹正徳、大橋靖雄、工藤昭夫、塩見正衛、鈴木茂、福富和夫
- (4) 議事
- contributed paper sessionに論文発表の申し込みを行ってきた参加者に返送する。
 - アブストラクト用タイプ用紙(1発表につきA4 1枚で、これをそのまま縮小印刷してアブストラクト集にする予定である。詳しくは、ニュース・レター№9のプログラム委員会報告参照)
 - タイプ要項
 - 論文分類のためのキーワード記入用紙(多肢選択方式)の様式・内容について議論した。いずれも、大橋委員が作成した原稿をたたき台にして、若干

の修正を加え最終案とした。(10月31日に印刷依頼を行なった。11月第2週から発送を行なう予定である。)

2. Invited papers の proceedings をどういう形式で発行するか議論を行なった。

- 登録時に参加者に渡す予稿集のみにするか。
- discussionの内容を踏まえて講演者に手を加えてもらい、会議後にもう一度論文を集めるか。
- 上記の場合、どこかの出版社から proceedings を出版してもらうか。

など、前回の運営委員会(8月10日)から懸案の議題であるが、結局、予稿集のみを発行する方針に決定した。内容のすぐれた invited papers は Biometrics に投稿してもらうべきであること、論文集を2度発行することは当委員会の負担が極めて大きくなること、上記決定の主な理由である。

なお、講演者が決まりしだい、予稿集用のタイプ用紙とタイプ要項を発送することを確認した。予稿集もアブストラクト集と同様、送られた原稿をそのままオフセット印刷する予定である。ページ数の上限は12ページ、期限は4月末日と決定した。

3. 1,2の決定事項を Programme Committee の chairman、D.L.Solomon に(見本の原稿用紙なども同封して)手紙で知らせることにした。

4. contributed papers のアブストラクトの査読担当者を大橋、斉尾(乾二郎)、福富の各委員にお願いすることにした。上記3委員に独立に査読してもらい、contributed paper sessions の構成と論文の分類に関する第1次案を作ってもらい、それを基にして委員会で検討を行なうことにした。なお、上記3委員では内容の理解が困難な論文については、プログラム委員会の適当な委員に査読を適宜お願いすることにした。

アブストラクト査読の期間は明年1月~3月、委員会での(第1回目の)検討は、4月なかごろになるであろう。

5. invited paper session の一つにパソコンの話題があるので、パソコンのハード、データ処理・統計解析関係のソフト(汎用機用のソフトも含む)のデモンストレーションを企画したらどうか、という意見が出された。若干の検討の結果、日本で開催する以上、国産製品が出品されないのは困る、ということから、国内主力メーカーに出品の打診を行なうことにした。(大橋委員が担当する)

よい感触が得られれば、プログラム委員の中から担当を選び、本格的に準備を進めることになるだろう。

6. (もし開催が可能になれば) satellite meeting をどのようなテーマで行なうかもプログラム委員会で検討すべきことであるが、寄付金の集まり具合など具体化の条件がまだはつきりしないため、次回以降の検討課題とした。

(以上 文責・大橋靖雄)

第12回国際計量生物学会議 組織委員会

国際会議委員

浅井 晃	千葉大学理学部長
阿部 裕	大阪大学医学部教授
伊藤 清	学習院大学理学部教授
大崎 純	山口大学医学部教授
岡崎 陽一	人口問題研究所所長
川崎 健	東北大学農学部教授
工藤 昭夫	九州大学理学部教授
斉尾 乾二郎	東京大学農学部教授
竹内 啓	東京大学経済学部教授
角田 重三郎	東北大学名誉教授
広崎 昭太	国立公害研究所研究室長
福島 要一	環境科学調査センター
山田 行雄	京都大学農学部教授
山本 俊一	東京都老人総合研究所理事
山本 純恭	東京理科大学理学部教授

(・日本学術会議会員)

運 営 委 員

飯 淵 康 雄	琉球大学保健学部教授
井 山 審 也	国立遺伝学研究所研究室長
太 田 邦 昌	東京経済大学助教授
大 竹 正 徳	放射線影響研究所
大 橋 靖 雄	東京大学工学部助手
丘 本 正	大阪大学基礎工学部教授
奥 野 忠 一	東京理科大学工学部教授
開 原 成 允	東京大学医学部助教授
仮 谷 太 一	川崎医科大学教授
小 泉 明	東京大学医学部教授
後 藤 寛 治	北海道大学農学部教授
後 藤 昌 司	塩野義製薬解析センター長
駒 沢 勉	統計数理研究所研究室長
佐久間 昭	東京医科歯科大学教授
塩 見 正 衛	草地試験場生態部研究室長
渋谷 政 昭	慶応大学理工学部教授
嶋 津 靖 彦	遠洋水産研究所主任研究官
正法地 孝 雄	広島大学総合科学部助教授
新 谷 茂	武田薬品中央研究所
鈴 木 茂	農業技術研究所研究室長
椿 広 計	東京大学工学部助手
中 上 節 夫	田辺製薬
中 浜 博	東北大学医学部教授
長谷川 政 美	統計数理研究所研究室長
林 知己夫	統計数理研究所所長
菱 沼 従 尹	寿命学研究会理事長
福 富 和 夫	国立公衆衛生院研究室長
古 川 俊 之	東京大学医学部教授
堀 江 正 樹	農業技術研究所調査科長
柳 川 堯	九州大学理学部助教授
吉 沢 正	山梨大学工学部教授

幹 事 会

浅井晃、井山審也、奥野忠一、小泉明、佐久間昭、
正法地孝雄、鈴木茂、竹内啓、長谷川政美、
広崎昭太、山本俊一

実行委員会

上記幹事に以下の4名を加える。

大橋靖雄、嶋津靖彦、椿広計、鳩山由紀夫

募金部会

井山審也、太田邦昌、奥野忠一、開原成允、

小泉明、駒沢勉、佐久間昭、林知己夫、

◎菱沼従尹、古川俊之

経理部会

◎井山審也、太田邦昌、鈴木茂、

プログラム部会

(プログラム専門委員会)

大竹正徳、岡崎陽一、開原成允、仮谷太一、
工藤昭夫、小泉明、齊尾乾二郎、塩見正衛、
鈴木茂、◎竹内啓、福富和夫、山本俊一

(出版専門委員会)

大橋靖雄、丘本正、後藤寛治、◎渋谷政昭、
角田重三郎、中浜博、堀江正樹

(広報専門委員会)

後藤昌司、新谷茂、中上節夫、鳩山由紀夫、
柳川堯、◎吉沢正

第12回国際計量生物学会議 の開催のための準備・運営に 関する合意書

第12回国際計量生物学会議(以下「国際会議」という。)を共同して開催する日本学術会議及び日本計量生物学会は、国際会議の開催のための準備・運営等に関し、下記のことについて合意する。

記

1. 国際会議の開催のための準備・運営等についての主催者間の協議及び関係国際学術団体等との連絡のため、それぞれの代表をもって、第12回国際計量生物学会議組織委員会(以下「組織委員会」という。)を発足させる。
2. 組織委員会を構成する委員は、別紙1(後掲)のとおりとする。
3. 組織委員会運営要綱は、別紙2(後掲)のとおりとする。
4. 国際会議の経費分担は、次のとおりとする。
 - (1) 国費をもって支弁する経費

日本学術会議が国費をもって支弁する経費は別紙3(12頁参照)の経費分担基準によるものとし、予算の範囲内で支弁する。ただし、昭和59年度に日本学術会議が国費をもって支弁するものについては、国(日本学術会議)の昭和59年度予算成立の際に、日本学術会議が提示するところによるものとする。

(2) 国費をもって支弁する経費以外の経費
国際会議開催のための経費のうち国費をも
って支弁される経費以外の経費については、
日本計量生物学会が負担する。

5. 国際会議開催のための経費のうち国費をも
って支弁するものについては日本学術会議におい
て取り扱い、国費をもって支弁される経費以外
の経費に充当される参加費、寄付金等の徴収又
は募集等及びそれらの経理事務については日本
計量生物学会が行うものとする。

昭和58年9月21日

日本学術会議会長

塚田裕三

日本計量生物学会会長

林 知己夫

第12回国際計量生物学会議組織委員会

—日本学術会議(国際会議委員会)—

浅井 晃	千葉大学理学部長
阿部 裕	第7部会員、大阪大学医学部 教授
伊藤 清	第4部会員、国際会議主催等 検討委員会委員、学習院大学 理学部教授
大崎 純	第7部会員、統計学研究連絡 委員会委員、山口大学医学部 助教授
岡崎 陽一	人口問題研究所長
川崎 健	第6部会員、東北大学農学部 教授
工藤 昭夫	九州大学理学部教授
斉尾 乾二郎	東京大学農学部教授
竹内 啓	東京大学経済学部教授
角田 重三郎	第6部会員、東北大学名誉教 授
広崎 昭太	国立公害研究所環境情報研究 室長
福島 要一	第6部会員、統計学研究連絡 委員会委員、環境科学調査セ ンター
山田 行雄	京都大学農学部教授
山本 俊一	東京都老人総合研究所理事

山本 純 恭	第4部会員、統計学研究連絡 委員会委員、東京理科大学理 学部教授
--------	--

—日本計量生物学会(運営委員会)—

飯淵 康雄	琉球大学保健学部教授
井山 審也	国立遺伝学研究所応用遺伝部 第2研究室長
奥野 忠一	東京理科大学工学部教授
開原 成允	東京大学医学部助教授
小泉 明	東京大学医学部教授
後藤 寛治	北海道大学農学部教授
駒沢 勉	統計数理研究所第4研究部第 2研究室長
佐久間 昭	東京医科歯科大学教授
正法地 孝雄	広島大学総合科学部助教授
鈴木 茂	農業技術研究所生理遺伝部遺 伝課遺伝第5研究室長
長谷川 政美	統計数理研究所第2研究部第 2研究室長
林 知己夫	統計数理研究所長
菱沼 従尹	寿命学研究会理事長
福富 和夫	国立公衆衛生院衛生統計室長
古川 俊之	東京大学医学部教授

第12回国際計量生物学会議組織委員会運営要綱

I (組織する目的)

第12回国際計量生物学会議組織委員会(以下「組織委員会」という。)は、第12回国際計量生物学会議(以下「国際会議」という。)を共同して開催する日本学術会議と日本計量生物学会が国際会議開催の準備・運営等について協議し併せて関係国際学術団体等との連絡を行うため、各主催者の代表をもって組織する。

II (運営)

組織委員会の運営は、昭和58年9月21日に主催者間で合意したこの要綱による。

III (任務)

組織委員会は、国際会議開催の準備・運営等に関し、次の事項について協議し併せて関係国際学術団体等との連絡を行う。

- (1) 国際会議の企画及び準備に関する事項
- (2) 国際会議の運営に関する事項

- (3) 国際会議の残務整理に関する事項
- (4) 前各号に関し、各主催者が分担する事務及び経費の調整に関する事項
- (5) その他前各号に付随する事項

IV (役員)

- 1 組織委員会に委員長及び幹事若干人を置く。
- 2 委員長及び幹事は、委員の互選によって定める。
- 3 委員長は、組織委員会を代表し、その職務を総括する。
- 4 委員長は、組織委員会を招集し、その議長となる。
- 5 幹事は、委員長を補佐して組織委員会の任務の円滑な遂行を図る。
- 6 委員長は、幹事のうち1人を総務幹事に指名する。

V (幹事会)

- 1 組織委員会に幹事会を置く。
- 2 幹事会は、委員長、幹事及び別項に定める部会の委員長をもって構成する。
- 3 委員長は、幹事会を招集し、その議長となる。
- 4 幹事会の任務は、次のとおりとする。
 - (1) 組織委員会に付議すべき事項について審議する。
 - (2) 組織委員会の任務のうち、委託された事項について連絡・協議する。
 - (3) 前号の規定に基づき幹事会が協議した事項については、次回の組織委員会に報告するものとする。

VI (部会)

- 1 幹事会は、その任務を分担させるため部会を置くことができる。
- 2 部会の構成は、組織委員会の承認を経るものとする。ただし、緊急の必要がある場合には、委員長の責任において設け、次回の組織委員会で承認を求めるものとする。
- 3 部会は、組織委員会の委員及び別項に定める専門委員をもって構成する。
- 4 部会の委員長は、組織委員会の委員をもって充てる。

VII (専門委員)

- 1 委員長は、幹事会からの申し出に基づき、組織委員以外の者に専門委員として協力を求めることができる。
- 2 専門委員は、委員長の申し出に基づき、日本計量生物学会会長が委嘱する。
- 3 専門委員は、部会の委員となり、その分担事項に関する任務を分担する。

VIII (細則)

組織委員会の運営に関し、本要綱に定めるもののほか必要な事項は細則で定めることができる。

IX (改正)

本要綱の改正は、主催者間の合意に基づかなければならない。

X (解散)

組織委員会は、国際会議の残務整理の事務の完了時に主催者間の合意に基づき解散するものとする。

「日本学術会議第13期会員選挙の中止」のお知らせ

日本学術会議中央選挙管理委員会委員長より昭和58年12月1日付で日本学術会議第13期会員選挙の中止の旨の通知が参りましたので、ここにお知らせ致します。なお、今回の法改正により、日本学術会議会員の選出方法が、「選挙制度」から「学術研究団体からの推薦制度」に改められることになり、また、現第12期日本学術会議会員の任期は、「昭和59年1月20日から起算して1年6ヵ月を超えない範囲内で政令で定める日の前日」まで延長されることになりました。

1984年度学会費納入のお願い

1984年度会費を下記要領にて至急お送り下さるようお願いいたします。

A会員(雑誌 Biometrics 非購読正会員)

2,500円

B会員(" 購読正会員)

6,000円

C会員(" 購読学生会員)

4,000円

納入方法は次の2通りです。

(1) 郵便振替(同封用紙を御利用下さい)

東京5-22365

〒162 新宿区神楽坂1-3

東京理科大学工学部経営工学科内

日本計量生物学会

(2) 銀行振込: 第一勧業銀行飯田橋支店

普通 061-1499027

日本計量生物学会

会計理事 太田邦昌

なお、1983年度及びそれ以前の会費を未納の方は、1984年度分と併せてお納め下さい。会費の納入状況は同封の郵便振替用紙の裏面に記されてありますので、御確認下さい。滞納の場合には止むを得ず雑誌配布を打ち切らせていただきますので、御了承下さい。

会計からのお知らせ

1984年度雑誌Biometrics 購読料について、次のような値上げ決定の通知が Biometric Society 本部より参りました。

Regular Member: \$19.00(現行\$16.00)

Student Member: \$13.00(現行\$11.00)

このため、日本計量生物学会としての会費も1984年度に応分の値上げをせざるを得なくなるかと思えます(4月の総会で正式決定されます)。値上げが正式決定された場合には、年会費の不足分を追って納入いただくことになるかと思えますので、あらかじめお含みおき下さい。

国際会議の経

事 項	日 本 学 術 会 議
委員手当 諸謝金	
職員旅費	現地討議事前連絡・随行（日本学術会議事務局職員） （地方で本会議が開催される場合は、本会議及び地方で開催される （組織委員会・幹事会への出席旅費を含める
委員等旅費	国際会議委員会 本会議 組織委員会・幹事会・部会 } （国際会議委員のみ）
消耗品費	事務用品（国際会議委員会，組織委員会，幹事会の開催・関係国際 団体等との連絡・国外参加者との連絡）
印刷製本費	第1回サーキュラー } （国外参加者分） 第2回サーキュラー } 委員会資料・記録（国際会議委員会・組織委員会・幹事会） 開会式招待状・封筒 主催者レセプション招待状・封筒
通信運搬費	第1回サーキュラー } （国外参加者分） 第2回サーキュラー } 委員会資料・記録（国際会議委員会・組織委員会・幹事会） 開会式招待状 主催者レセプション招待状 常時連絡（郵便料） } （国際会議委員会，組織委員会，幹事会の開 常時連絡（電話料） } 関係国際学術団体等との連絡・国外参加者 外国電報 } の連絡
借料・損料	会議場（付帯設備使用料を除く）
会議費	主催者レセプション（国外参加者・同伴家族・招待者分）
賃金	事務補助 タイピスト
招へい外国人 滞在費	国際学術団体の役員 特別講演者
募金経費	

註 国際会議開催の事務・経費の共同主催者間の分担は、原則として上記の分担基準によ

費 分 担 基 準

国内学協会	
	同時通訳謝金, 翻訳謝金, 校正謝金
)))	現地討議事前連絡・随行(国内学協会事務局職員) ((同 左) ()
	運営委員会・募金委員会, 経理委員会等下部委員会 本会議 組織委員会・幹事会・部会 } (運営委員会委員・専門委員等) 現地討議事前連絡・随行
学術	事務用品(部会, 運営委員会, 同下部委員会の開催・関係国内学協会等との連絡・国内参加者との連絡)名札, 資料ケース, バッチ, 記録写真, 録音用テープ
	アナウンスメント 第1回サーキュラー } (国内参加者分) 第2回サーキュラー } プログラム, 参加者リスト, アブストラクト, 本会議議事録 委員会資料・記録(部会・運営委員会・同下部委員会)
借 と)	アナウンスメント 第1回サーキュラー } (国内参加者分) 第2回サーキュラー } 本会議議事録 委員会資料・記録(部会・運営委員会・同下部委員会) 常時連絡(郵便料) } {部会・運営委員会・同下部委員会の開催・関 常時連絡(電話料) } {係国内学協会等との連絡・国内参加者との連 格 }
	会議場付帯設備使用料 事務室 ゼロックス借料, 欧文タイプライター借料, 複写機借料, 会場連絡バス, 同時通訳ワイヤレスレシーバー
	主催者レセプション(国内参加者分・追加分) パンケット 会期中接待
	事務補助 本会議開催中アルバイト
	招待講演者 主要座長
	人件費・印刷費・会合費等

るとするが, 当該国際会議の現状に応じ, 個別的に検討することとする。